

▲白井コメント▼

一昨年の大会報告では報告が歴史的な展開について行なわれたが、戦前の場合と戦後の場合とで農村自治ということで取上げられた対象をみるとかなり対照的であった。戦前のものについては村是等がとりあげられたが、ここでは行政市町村の中に入ってその中で相対的に独自の主体性が発揮された。その部分を自治のひとつの対象として取り上げていたのに対し、戦後の部分については村落レベルの生産と生活をどの様に再編してゆくかという主体的な動きに焦点が当てられていた。

私は、どういう事象を自治と呼んでいいのかという点を明らかにしないと、どうも考えきれないと思う。そこで、高山会員から共同的自治の問題と農村自治への移行の捉え方が明らかでない、という整理があったが、考えるに村の方を主にして村が自分達の生産と生活の問題を自分達でなんとかやっているところに自治を見つけようとする場合に、そこで抜け落ちてくるのは、先程似田員会員の指摘にもあったが、行政との絡みがどうなっているのか、それと戦前の市町村の中で相対的独自性を持っているような主体的な動きとの

絡み方の違いが明確になっていないのではないか。その辺に主体の問題が絡んでくるように思われる。現在の場合と戦前の場合との違いを考えないでよいのか。それを考えておかないと、余田会員が『通信』の中で書かれているような、村が自分達の問題を自分達で決めていることに自治を見出すという指摘が形式的なものになってしまうのではないかと思う。そこでどうしても、共同体の問題とともに農民の問題、農民規定の問題に戻ってしまっている、そこから進めないでいるというのが私の現状であるように思う。

もうひとつは、運動として自治を捉えるという場合、それと初めの大会での岩本会員による農民運動の報告の中で出された抵抗としての自治とがどの様に関連するのかという問題ももつと詰める必要があるかと思う。